



「うむむ。」

右手をぐっば、ぐっばと何度も開いたり閉じたりしながら殺風景な通路を進むアイシヤ。

アイシヤもレントとカルミア同様、分かれ道を進むと背後の道が閉ざされ、直後目の前に現れた球体からの謎の発光を受け、アニマウエポンが強制解除されてしまっていた。

最初は動揺こそしたものの、引き返す事無く先を進む事にした。

マーゴが作る迷宮というのは、マーゴが脱出するための時間稼ぎをするか、獲物を畏に嵌める為に使われる。

今回の様な急ごしらえな部分がある迷宮は、脱出の為の事が多く、そういった迷宮は多少の危険は承知で突き進んだ方が綻びを発見し易く、脱出も含め上手に行く事が多いのだ。

だが、今受けた光の所為で能力の制限を受けてしまった。

しかしこういう時こそ冷静に対応すべきとアイシヤは目を閉じ自身の体のエネルギーの流れを確認する。

光を浴びた瞬間に激しい脱力感に襲われた事からまずエネルギーの関係の基本能力をチェックする、

バリア機能は正常で固さの調整もできたのでエネルギーの根幹の部分へ影響は殆どない、

だがアニマウエポンの流れは非常に不安定になっていて顕現させる事が殆ど出来ない様だった。

だが感覚的に全てが駄目という感じではなかった為色々試していると、右手と右足のアニマウエポンのアーチャーだけ顕現させる事が出来た、

試しに右足のアニマウエポンを起動しようとしたが出たのはアーチャーだけで機能は使えず

右腕も出力が安定しない状況だったので

足と腕のアニマウエポンを構成しなおして足の方は二回りほど小さく、腕はグローブ状に構築する。

「この形、久々だね。」

アニメマウエポンのこの形態は、
エネルギー枯渇寸前の時や、
何かの能力の影響を受けた際の
緊急時に使われる。

マーゴを破壊する効果を生む金色の
部分をピンポイントで当てなければならず、
しかも威力は平時の半分程度なのだが、
殆どエネルギーを消費しないというのが
最大の特徴である。

付けている感覚はいつものアニメマウエボンと
変わらないのだが、手を開いたり閉じたりして
久々の使用感をなんとなく
確認しながらアイシヤは先を進んでいった。

椅子を投げつけた場所から現れた
それは、太いケーブルが適当に繋がられたような
姿をしていた。

ウネウネと蠢くそのケーブルに
アイシヤは心の中に思わず

(なにこれ?...)。

という感想が浮かんだ。

まるで生物のように蠢いているし
先端に口の様な物がついている部分もある、
だが意思の様なものを感じられない、
それだけならばマシゴトが作るトラップに
よくある特徴だったのだから、
そのケーブルからなにかやら
自分を値踏みするようない生物特有の
視線の様なものを感じるのだ。

「お……つと。」

睨み合いの状況を先に崩したのは
ケーブル触手の方だった。

アイシヤに飛び掛かってきたケーブル触手だが、
その動きは単純一直線、
普段ならばカウスターで一撃叩きこめば終わり、
そのぐらゐの状況だったが、
今は敵の罠の中で能力に制限が掛かっている、
なのでアイシヤは更なる罠を警戒し
回避を選択する。

（そろそろ、大丈夫そうかな？）

2回目の突撃でケーブルの動きは
完全に見切ったアイシヤ、
念を押して5回目まで避けながら様子
を伺っていたが、
どうやら単調な動きしか出来ないようだったので
アイシヤは次の突撃にタイミングに
合わせるつもりで右手にエネルギーを貯めた。

その時である。

「んっ……」

「えっ……!?!」





「んっ…何、ムソ…。」

（この光、が、マズイのは。）

アイシヤがカウンターでケーブル触手を破壊しようとした時、その時、ケーブル触手は向かってきたケーブル自体から青い光が放たれた。

一瞬の判断でアイシヤはその場から飛びのき回避しようとしたのだが、足から動くための力が失われたように動かさずガクガクと膝が笑ったような状態になってしまう。

何らかの攻撃を受けたと判断し、そのままケーブル触手に拳を振りかざす事にしたが、一瞬前に込めたエネルギーが霧散して、攻撃力の無い拳を放つてしまう。

当然破壊エネルギーの無い攻撃でケーブル触手を壊す事は出来ず、ケーブル触手は突撃した勢いのままアイシヤの体中に凄まじい勢いで絡みついていったのだった。

絡みついた触手を振り解こうともがくアイシヤだが
触手が先程と同じ青い光を発すると
それに直接触れた箇所から力が急激に抜けていく、

何故か触れていない部分からの光の影響は
あまり受けられないようだつたがもうすでに触手は
体中に巻き付いてしまっている、

光の効果から逃げられる部位がすでに
無いアイシヤはその場から一步も動く
事ができないまま触手に成すままに絡みつかれ
両手は頭の上で、足は地面に固定されてしまう。



「んいっっっ！
くっっっっっ！」

「いっいっっっ、
的確に感じるところを……くっっ。」

その後、に現れた触手は先端が開くと、中には歪な舌の様な物が蠢いており、それがアイシヤの両腋に同時にしゃぶりつく。



思わず体がビクンと反応してしまっただが、アイシヤ、吸わないように浸透した蒸気だっただが、どらやら皮膚から浸透した感度を上げる効果もある事に敏感な所を刺激されたことで気付かされる。

「あっ、そまっ、やめっ、んぐらんらんっ♡！」

腋を舐めまわす触手とは別の1本がアイシヤの下半身を守る戦闘着の中に潜り込み秘所を目掛け進もうとする

流石に危機感を覚えるアイシヤは何とか力を振り絞って抵抗と呼ぶには弱々しく難無の侵入しでいく触手は下腹部付近で止まると先端の三本の細い触手がへと向かい挟み込み振動を始めた。



ビクッ♡

「…っあ♡…あ うあ、 あ♡、 んぐう…。」



ヴヴ、ヴヴと断続的な振動音が
アイシヤの股間から響く度にアイシヤの腰が
ビクッビクッと跳ねる。

その振動には快感を伴う電流も付与されており、
そんなものを神経に密集した敏感な部位に
流され、媚薬に侵され始めた体は
たちまちのうちににより発情させられた。
敏感な体はさらに感度を増していった。

「うあ…んっ…ぐ…ぞ、くっううっ♡、はあ あんっ♡!。」

腋を舐めしやぶる舌、クリトリスを責める振動、
生物的な要素を多く持つこの触手群だが、
その動きはまるで機械の様な正確でかつ一定の動き
を繰り返し確実にアイシヤを追い詰めていく。

そして――





「あ……っ……。」

これは、まずい。自分の秘所に押し付けられる触手の形状を
確認したアイシヤの胸中に生まれる焦燥感。

このタイプの触手がする事といえれば1つしかない、
だが今の自分の発情具合でそれをされれば可能性はある。
場合によっては反撃不能な程に追い詰められる可能性がある。

それは避けねばならない、
一刻も早くこの縛めを解かねばと全身、
特に足に力を入めるアイシヤだったがその反抗を察知したかのように
触手は発光を強め、アイシヤの反抗力を奪い去ってしまう。
そして予想していた通りの動きを股の触手が開始する。





「んぐっ!!」

「あんんんっ!!」

んぐっ!!
んぐっ!!
んぐっ!!

んぐっ!!
んぐっ!!

んぐっ!!
んぐっ!!
んぐっ!!

んぐっ!!
んぐっ!!
んぐっ!!

「あああ♡!、ひゃぶううっ!、んぼあ!?!おっ!。」

更に新たな触手が緩んだアイシヤの口に潜り込む、
触手は下腹部に貼り付いている触手と似た形状で、
先端に付いた細触手は口内に潜り込みアイシヤの舌に絡みつくこと
桃色の光を発し明滅を始める、

その明滅は下腹部に貼りついている触手にも起こる。

そして全ての触手の責めがその明滅に同調するように
動きを合わせアイシヤを抗えぬ頂へと追い立てていく……。





「あうっ、酷い目にあつた……」

座って休憩していたアイシヤが立ち上がる。

オステオン・シデーロスの責めはその後も続いたが、1時間経った時、突然動きを止めたかと思うと、ポロボロと崩れていってしまったのだ。

結局自力での脱出は叶わず、閉られ続けた所での突然の開放に更なる畏の到来を脱力した体で警戒したアイシヤだった。何も起こる事は無かった。

さすがに脱力感が拭えぬまま先を進むのは難しいと判断したアイシヤは少し休憩することにする。幸い10分程度の休憩で青い光による脱力感は消え、動けるようになった。

（でもまだ体は熱いよね……、ちよつと気をつけないと。）

動けるようになったものの、先程の催淫蒸気の効果が残っており、責めに由来する熱が抜けた体からは、だしばらく熱が抜けた体からは、休むからと熱が抜けた体からは、アイシヤは警戒心を持っていかないで、

「広い場所だなあ……あつ。」

開けた扉の先はまた違う倉庫の様な場所だった、
罨を警戒して進むとアイシヤは
視線の先に倒れている人影を発見する。

「罨の可能性大だけど、周りはつと……あれ？」

こういった場所に人が倒れている場合、
マーゴが人間を罨にする罨の場合があるので
助ける前には周辺の警戒と探索を
優先させるものなのだ。

だが周囲にマーゴの気配は無いようだった、
ならばここからは
おそらく逃げ遅れたであろう人の救助だ、
アイシヤは警戒しつつ倒れる人影に近づくと、

「大丈夫ですか？」と声をかけるが反応は無い。

慎重に抱き起こした人は
ひよろつとした外見で髪がカラフル、
体中に金色のアクセサリーを沢山つけているが
服装はだらしなかった、

アイシヤはそれを見て内心
うわあ、ひどいチャラ男と思っただが
救助する人間の性格なんて
今は気にする事ではない。

男の状態を確認すると意識が無いだけで、
怪我なども無く無事なようだった。



「な……レ

エ

だ

れ

おん

にちや……

ほ

あ

觸體は言葉を発し、会話も可能だった、アイシヤは知らない事だが、その声はラクエウスに黄金の觸體を被せられた男のそれだった。

黄金觸體は最初はアイシヤの言う事に普通に答えていたが途中からまともな言葉を発せなくなっていく。

「(どういう事?まさかマーゴに喰われてる?)」

「大丈夫!? しつかり意識を保って!」

内部の人間が喰われ取り込まれているのではと
思ったアイシヤは切迫した状況だが打開策を模索
しつつ、内部の男性に意識を保つよう呼びかける。

ん……

（うん、下級マーゴの方がまだマシなんだよなあ。）

黄金鬍髯の責めは何の工夫も無いただ突くのみで、
しかもこの凶体に似合わぬ細さの棒だつたりする事もあつて
歴戦のマーゴハンターたるアイシヤを悦楽の沼に沈めるには至らず、
犯されている側のアイシヤですら変に必死な鬍髯を
若干かわいそうな目で見てしまふくらいだつた。

「くそ、腕が、チツ、
どうすりや……。ああ、こういう感じか。」

黄金鬍髯の体表がボコボコと沸いてるように蠢く
アイシヤの反応が薄い事にイラついてるようで
何かしたんだらうなとアイシヤは観察してると、
黄金鬍髯の胴体付近から腕のようなものが数本生えてきた。

（あ、腕っぱいの作れたんだ。すごい。）

言葉には出さないがなんとなく褒めてあげてみつつ、
それで一体何をされるのかなと思つてるとアイシヤの顔面に
作つた拳が振り下るされボゴォ！という鈍い音が響いた。

ズン
ズン

「ふうすりや女のアソコは良く締まるんだよ、おらあ！」

黄金鬍髯の拳は身じろぎ出来ないアイシヤの顔面にクリーンヒットしたが、常時体中に張られているバリアの効果でかすり傷すら受けていない。

（うわ。）

アイシヤの感情の温度が低くなる、マーゴの中には暴力を振るってくる趣味のヤツもいるが、あくまで食事の為に行うという事に連なっているので、自分のテクニクの無さを暴力で解決するという方法をマーゴが取るといふのはありえないのだ。

「オラ、しっかり締めねえともう一発いくぞ？、あん？」

おそらく中の人間はこれまでそういうプレイしかしてこなかったのだから、そのあまりにクズな行動に思わずアイシヤは

「…チツ。」

と舌打ちだけで返答してしまう。

ズッ
ズッ

「……くっそのクソアマあ!。」

アイシヤの舌打ちに激昂し怒りの拳を見舞う黄金胴體、
だがいくら連打しようとも
黄金胴體にアイシヤのバリアを破る事は出来なかった。

(これは……もう手遅れかな?)



アイシヤに殴られて遊ぶ趣味は無い、だが
快樂よりも痛みの方がまだ思考を奪われない分マシだと思ふ、
だが今は気持ちよくも痛くもない、
お陰でこの胴體よりもまずはあの光の対策をしよう
十分に考えをまとめる事もできた、

そして中の人間に関しては
正直もう知らん、運が良ければ助かるだろう程度の気持ちにはなっていた

ズッ
ズッ



「...」

